

民主党の惨敗と 第三極の躍進を考える

鶴井 亨

北海道新聞東京報道センター長

振り子選挙区と鉄板選挙区

二〇一二年総選挙は、小選挙区制導入から六回
目の衆院選だった。二〇〇五年郵政選挙、二〇〇九
年政権選択選挙と、二回連続で民意が大きく振
れる結果が続いたが、今回の振れ幅はこの二回の
結果を上回るものになった。

自民党 二九四議席（二七六議席増）
民主党 五七議席（二七三議席減）
日本維新の会 五四議席（四三議席増）
公明党 三一議席（一〇議席増）
みんな 一八議席（一〇議席増）
日本未来の党 九議席（五三議席減）
共産党 八議席（一議席減）

あらためて、選挙結果を見つめると、自民党と
民主党の増減分がそっくり入れ替わる形になった
ことが分かる。

○五年郵政選挙以来、当選者が「自民↓民主↓
自民」と、振り子のように揺れ動いた選挙区は、
全国三〇〇選挙区の半数近くに上った。
前回と今回に絞って比較すると、約七割の選挙

区で勝った政党が入れ替わった。ブロック別では、
北海道が九二%、近畿七九%、東京七六%、東海
七三%、北関東七二%の順。北海道での大敗ぶり
が鮮明になる。

閣僚も苦戦を強いられ、藤村修官房長官、城島
光力財務相、三井辨雄厚生労働相、小平忠正国家
公安委員長ら八人が落選。これは現憲法下で最多
記録で、民主党政権への失望感がいかに強かった
かを物語るものだ。

少し観点を変えて、民主党の大敗ぶりを見てみ
よう。

「鉄板選挙区」と呼ばれるものがある。どんな
に逆風が強くても、惜敗率による復活当選ではな
く、自力で勝ち上がってきた選挙区だ。

民主党の場合、○五年郵政選挙で、選挙区で当
選したのは五二人。このうち、○九年、今回と三
回連続で民主党から立候補したのは四一人だっ
た。

その中で、今回の逆風を乗り切って、小選挙区
で当選したのは一五人だけ。民主党の「牙城」が

三分の二近くも落城し、比例復活当選も一人に
とどまった。「鉄板」以外の選挙区が総崩れになっ
たの言うまでもない。

この傾向が顕著に表れたのが、北海道ブロック
である。郵政選挙では、1区、2区、4区、6区、
7区、8区、9区、10区の八選挙区で、民主党が
勝利した。

それが今回はこの八選挙区を含め、道内の一二
選挙区で全敗。道内全体に広がった「反民主」の
激流に飲み込まれていった。

横路孝弘氏の1区、鉢呂吉雄氏の4区は、郵政
選挙で自民党に復活当選を許さない「特Aの鉄板
選挙区」だったが、横路氏は小選挙区で敗れ、比
例復活に回った。鉢呂氏に至っては、惜敗率によ
る復活当選もならなかった。

一方、道外に目を転じると、今回も勝ち残った
一五の鉄板選挙区は次の通りだった。

宮城5区（安住淳、岩手3区（黄川田徹）、福
島3区（玄葉光一郎）、茨城5区（大島章宏）、埼
玉5区（枝野幸男）、千葉4区（野田佳彦）、静岡
5区（細野豪志）、静岡6区（渡辺周）、愛知2区
（古川元久）、愛知11区（古本伸一郎）、三重2区（中
川正春）、三重3区（岡田克也）、京都2区（前原
誠司）、京都6区（山井和則）、奈良1区（馬淵澄夫）。

この一五の常勝選挙区と、鉄板が割れた道内の
選挙区にどんな違いがあったのか。「民主党王国・
北海道」崩壊と、再生のヒントが潜んでいると思
われる。

比例票から見る民主の歴史的大敗

民主党の惨敗は、比例代表から見ても、くつきりと浮かび上がる。

自民	一六六二万四千票（五七議席）
維新	一二二六万二千票（四〇議席）
民主	九六二万八千票（三〇議席）
公明	七一一万六千票（二二議席）
みんな	五二四万五千票（一四議席）
共産	三六八万九千票（八議席）
未来	三四二万三千票（七議席）

民主党は前回よりも約二千万票も減らし、得票率でも四二％から一六％にダウン。維新にも後塵を拝し、第三党に転落した。

二〇〇〇年以降の総選挙で、民主党の得票率は二五％を下回ることなく、自民党に圧倒された。二〇〇五年郵政選挙でも、三一％を保っていた。こうした比例票の底割れも、壊滅的な敗北の要因となった。

自民党は比例代表の得票率は二七・六％で、前回からほぼ横ばい。議席数でも二増にとどまった。裏返すと、選挙区だけで大幅な議席増を果たしたことになる。自民党の選挙区全体の得票率は四三％だったが、獲得議席数は全体の七九％も占めた。小選挙区制の特徴が際立って表れた格好となった。

自民党大勝は、有権者が自民党に積極的な信任を与えたわけではなく、民主党への強い不信感がもたらしたものであることは、既に多くの識者が

指摘している。比例代表から分析すると、それが明確に裏付けられる。

民主党の自滅については、「マニフェスト違反」「ゆがんだ政治主導」「収まらない党内抗争」などが挙げられるが、紙幅の関係もあり、ここでは詳細な言及は避ける。民主党改革創生本部（本部長・海江田万里代表）の敗因分析を注目したい。

第三極の勢いはいつまで続くのか

自民党圧勝の陰で忘れてならないのは、第三極の台頭である。

二大政党制を志向した小選挙区制では、第三勢力は埋没する傾向にあるが、今回は比例代表との並立制という特色を生かし、維新の会とみんなの党が躍進した。

これまでの衆院選比例票をみると、自民、民主の二大政党の合計得票率が〇三年七二％、〇五年六九％、〇九年六九％と、七割前後を占めてきた。今回は自民、民主両党で五割を下回り、逆に維新、みんな、未来の第三極の得票率が計三五％と健闘。民主から離れた票の多くが、自民よりも第三極に流れたことが分かる。

中でも、維新は全国一ブロックで満遍なく得票し、北海道と東北以外の九ブロックで民主党を上回る票を集めた。

これは、維新の会を関西圏のローカル政党から脱皮し、国民政党に飛躍する足がかりを作ったことを意味する。

維新の会については、衆院解散直後に、石原慎太郎前東京都知事が率いる太陽の党と合併し、政策面の調整が生煮えのまま、選挙戦に突入したことで、勢いにかげりを見せた。当初は三けたの議席数が目標とも言われていた分、大躍進の印象は薄い。民主党の惨敗によって、第二党を競い合う勢力に位置づけられることになった。

みんなの党も一〇議席増を果たし、非自民勢力の一角を担う足場固めに成功した。

維新とみんなの勢いは、総選挙後も持続している。

その一例が、一月二七日投開票の北九州市議選（定数六二）だ。両党が擁立した計六人の新人は全員当選。維新が近畿以外の地方選で候補者を立てて当選したのは初めてだった。

民主党は現職一〇人の擁立にとどめる守りの選挙だったが、それでも三人が落選した。

維新は橋下氏が率いる大阪系と、旧太陽の党との足並みの乱れが表面化し、将来的な党分裂の可能性も指摘されるが、有権者が民主党の体たらくに失望した分、維新への期待はなお高止まりしていることをうかがわせた。

今後の焦点は、六月の東京都議選だ。ここで維新が追い風を維持できれば、七月の参院選で民主党が再び大苦戦を強いられるのは確実。民主党にとつて、党存亡の危機に直面することになり、文字通り崖っぷちの戦いとなる。

へつるい とおる